

# 殴打探偵フェイスレス

高柳総一郎

ぼくの武器は何も持っていないことだ。文字通りの丸腰だ。僕は言う。怖がらないでと。

でも、十中八九相手はそう思ってくれない。害意が無いことを分かってくれない。怯えた彼らは僕に向かって、震える手で握りしめた銃のトリガーを引く。

ぼくはそれでも言う。怖がらないでと。誰も傷つける気は無いのだと。犯罪者たちはぼくを罵る。そんなことを言つて、お前は俺たちを殴るのだ。どうにかして、退けようとするのだと。

それは大いなるまちがいだ。ぼくはいつべんたりとも誰かを傷つけようと思つたことなどない。

ただ君たちのやることを、善意から見逃せないだけさ。君たちは欲望に狂つてそんなことをしているだけなんだ。ぼくが何も欲しくないように、きみたちだつて欲をかかなきゃ幸せに暮らしていけるはずさ。

ぼくは何もかも捨てた。

家族も捨てた。職も捨てた。寝るところも着るものもいらなかつたし、空腹さえし

のげれば食べるものはなんだって良かった。

でも世間の人たちはそんなぼくを異常だと罵るのだ。ぼくにとっちゃそんなものなんだってよかったけれど、ぼくが唯一捨てなかつたものにとつてはうまくなかつた。ぼくという存在が死によつて消滅すれば、おそらく誰も文句など言わなくなるだけの話だ。

ぼくは顔をなくした。

ぼくをののしる人たちがぼくを殴り、引き倒し、ぼくを蹴り、最後に薬品を浴びせたのだ。

まるでひん曲がつたはりがねのような、苦痛にのたうつ蛇のような声をほまくはあげた。それはぼくがぼくであつた最後の瞬間だ。

もともとぼくはクライムバスターというやつだつた。勝手に人々のために戦い、悪党をやつつけるのが仕事だ。

どうしてそんなことをしようと思つたのかは分からないけど、ぼくにはそれを始めようとした気持ちだけが唯一必要なものだつた。ぼくは家族を捨てた。正確には、惨めに死んだ家族の記憶を捨てたのだ。

ぼくはとても悲しかった。

ぼくにとつて家族とは自分の存在を定義するためのものだった。どこかの家の誰ベエ。それがぼく。でも家族を失った僕には、どう自分を定義つけなければいい？ ぼくは新たな存在にならなくてはいけなかった。ぼくには体があり、またぐらには性器がぶら下がっている。少なくともぼくは男だ。効果的にこの性器を使ったことはないけれど、自分が何者であるか定義するのに役には立つ。

教養がないのも問題だった。

ぼくは学校に通った覚えがなかった。父親は酒飲みのボンクラアル中で、僕が生まれてすぐに死んだ。母親は娼婦でH I Vのキャリアー。母親は股を開くことで金を稼ぎ、たびたびぼくの顔を見るたびに殴った。

ぼくの顔はとても醜いらしかった。ぼくの価値観に醜いとかそうでないとかそういうものはなかったけれど、外に出るたびに殴られるのは参った。だから、顔を失くしてもすぐに立ち直ることができた。顔さえ隠せば、案外なにも言われないものだ。文句を言うものちよつかいを出すものはいくらでもいるから、そういうやつらは殴つてやった。

ぼくの力は強かった。

握手の力の加減がつかなくて、毎回参ったものだった。もつともぼくが握手するの

は、手すりとか石像くらいのものだ。僕の姿を見て握手をしようなんて輩はいない。ぼくはともうんざりしたのだ。

醜かった顔の皮がべろべろ剥がれて、焼けただれた筋肉の繊維が見えるようになったとき、ぼくは気づいた。

あのギャングぶつた黒人も、キュートな白人も、メテロセクシャルなラテン人も、金に汚いイエローモンキーも、薄皮剥いでしまえばみんな同じさ。

ぼくに捨てるものは数えるほどしか残されていなかった。

ぼくは顔を捨てた。捨てざるを得なかったのだ。代わりにひとつだけ得たものがある。『顔を捨てた男』。

ぼくの名前は『フェイスレス』。何もかも捨ててしまったけれど、一つだけ残ったものもある。

それは『信念』だ。

なにもかも捨てても、そう強要されて育っても、ぼくはこの世のすべてが薄皮剥げばすべて平等であることを知っている。

顔を覆った前頭マスクは赤い。血の色だ。薄皮剥いだ人間の色だ。ぼくの顔だ。ぼくがこの世の不平等を裁く。薄皮被った差別主義者共を、自分と違う者たちを虐げる

クズどもを断じてやる。それは彼らの生皮を剥ぐことに等しいだろう。ぼくはすべてを捨てた男。それくらい、なんてないことだ。

霧が漂う街、オールドハイト。

今日もここには様々な人々が行き交い、人の数だけ人生模様がある。

僕がいるのは、ニューロ・ヒル三階にある、東側のちいさな小部屋だ。ジャンク・ショップで仕入れてきた古い木製のデスク、そして椅子が二つ。ぼくが座るイスと、依頼人が座るイス。

廊下が軋んで、誰かの影がドアガラスに映る。裏写しに『DETECTIVE』とだけ白くペイントされたその前に立つ影に向かって、ぼくは声をかけた。

「どうぞ」

金属をヤスリがけしたような声だと自分ではそう思っている。思うだけだ。大して気にはしちやいない。

入ってきたのは、若い女性だった。つるつるした白い肌の持ち主。憂いを帯びたグリーンの瞳。白いレディ・スーツに身をつつみ、同じく白いどこかのブランドものの

ポーチを持っていた。

「依頼ですか」

ぼくはざりざりと喉をふるわせながら言った。

「依頼なら、前金として五百ドル頂きます」

「一方的なのね、ミスタ・フェイスレス。ビジネスする気がないみたい」

ぼくがヤスリがけられた鉄板みたいな声だとしたら、彼女は焼きたてのパンみたいに柔らかい声だった。ぼくはそんな彼女の声から出てきた痛烈な言葉に、獣みたいにぐるぐる喉を鳴らして笑った。

「よくわかりましたね。ぼくはこの金儲けというやつにどうも興味がないんです」

「変わった人。座っても？」

「どうぞ」

彼女はライリー・マクダエルと名乗った。オールドハイト探偵協会から、僕のことを知ってやってきたらしい。

探偵。ぼくのような人間の隠れ蓑。ぼくはお世辞にも神父のような平和的な人間ではないらしい。かと言って、ピザの配達員にはなれないし、マフィアだのチンピラだのクズどもの仲間入りもできない。ぼくはひとりだ。それで気楽なのだ。

「本当に顔無フェイスレスしなのね」

「よく言われます」

「でも思った以上に話しやすくして紳士的。とても気に入ったわ」

「気を悪くしないでほしいんですが、これは真似ですよ、ミス・ライリー」

「真似？」

「そう。にんげんの真似です。挨拶や話し方、人との関わり方——つまらない話でしたね。依頼は一体何ですか？」

ライリーは気を取り直し、ポーチの中からちいさな写真を取り出した。笑顔のライリーの肩に手を置く男が写っている。

「彼の名前はジャック。私の夫。二日前から、突然連絡が途絶えてしまったの」

それにしては随分と落ち着いている。ぼくはそう彼女に言おうと思つたが、答えはすぐ彼女から発せられた。

「彼、浮気しているの。二日や三日帰ってこないなんてザラ。それでも、私に申し訳ないんでしょね。必ず一日の終わりに愛してるってメッセージをくれるの」

「それが途絶えた？」

ぼくはさも興味があるような素振りで、手を組み身を乗り出した。彼女は頷き目を

伏せる。

「とうとう捨てられたのかとも考えたわ。自分でも覚悟しているつもりだったけど、諦めきれなかった」

「ジャックを探すのが依頼なんですわ」

「ええ。……それで、その後、殴ってやってほしいの」

殴る。非力な彼女に、満足行くようなダメージを夫に与えることは難しいだろう。だから、ぼくに頼んだのだ。ぼくには顔はないけれど、暴力はある。人を殴る拳が、蹴りつける足が残っている。ぼくはそれが使命だと考えている。

クズどもを殴る。蹴る。ぼくの正義を果たす。たとえ薄皮を剥いだその下が同じ人間だとしても、平等の権利を与えられぬクズどもに、自らの立場を思い知らせてやる。探偵協会も、そのへんの説明をきちんとミス・ライリーにしてくれたりしなかった。

殴打探偵。それがぼくの仕事。ぼくの仕事は探し出して終わりの無責任な探偵とはわけが違う。

「では、前金の五百ドルを頂きましょう」

ぼくはゴードンの中華料理屋で腹ごしらえをした。人を探す、そして殴るとなれば体力がいる。

仕事の時以外、ぼくは食事をしない。医者がそれでも大丈夫だと言ったから、そうしている。ぼくの脳は顔ごと焼かれておかしくなつて、一度死んで、再生したらしい。だから、人より若干違うことがたくさんある。

「久しぶりじゃない。金でも入ったの？」

筋骨隆々、チャイナドレスに身を包んだスキンヘッドの黒人。それがこの店のオーナーであるゴードンだ。売春婦は僕にとつて忌むべき存在だが、彼はそうした変態めいたことはしない。趣味でやっているドラッグ・クイーンだ。そして情報屋でもある。

「仕事さ」

ぼくはざりざりとそう言った。ゴードンはそれで納得したらしかった。まばらながら座っている周りの客も、ぼくのことを見ている。口元だけ引き上げたぼくのマスクの下の、ただれた肌を。

ゴードンがその視線を浴びているぼくに気づいたらしく、まゆを寄せながら言った。

「やめてよ、揉め事は。こないだ壁直したばつかなのよ」

「ぼくだって腹ごしらえの最中にケンカは売らない」

フライドライスを口の中に流し込み、ぐいと水で流し込んだ。味はしない。ぼくに味覚はない。食事はそのまま腹ごしらえのためにある。人によつてはお腹をふくらませる行為が快感だったり、憂鬱だったりするらしいが、いずれにしろ僕には無縁だ。

「だったらいいんだけど」

ぼくはもらった五百ドルをそのままゴードンに差し出す。ぼくはあまり金を持ち歩かない。それで十分生きていけるからだ。困ったときには、それなりに方法がある。

「この男を知らないかい。名前はジャック・マクダエル」

ゴードンは写真をまじまじと見つめていたが、首を振った。ぼくは五百ドルをそのままにぎらせる。

「知らないかい」

「会計は十ドルで済むのよ」

「チャンピオンは昼飯代を多く支払うものさ」

ゴードンは金をたくましい胸板付近の懐に入れてから、こんこんこめかみを叩きつつ言った。彼には彼のビジネスのやり方がある。儀式のようなものだ。

「ええとね。この男はちよつとヤバイわよ」

「どうして」

「連れてかれちゃつたのよ。誘拐。たぶん、ギャンブルかなんかじゃない？」

「場所は」

「オールドハイト川岸の倉庫街。あのへん、違法賭博やつてるから、その絡みじゃないかしら」

倉庫街を仕切るのは、不動産屋を隠れ蓑にしているギャング『マレット・ファミリ』しかない。ちと厄介だ。喧嘩に負ける気はしないが、ぼくだって数にうんざりするとはある。

浮気にギャンブルとなれば、借金だつてやつていよう。連れ出すのは面倒くさそうだ。

「ありがとう、ゴードン」

「お金さえもらえりやこのくらいなんてことないわよ」

「ぼくは金がきらいさ。でも君には感謝してる」

ぼくは赤い全頭マスクを被り直す。すなわちぼくの顔を。茶色のソフト帽を被るのは、ぼくの存在が世界にとって少しでも平等に近づくべきだからだ。顔を失つたフェ

イスレスという狂人より、まあ多少は人に近づけると思ってたことだ。

この世界の異質を受け入れるのは、ぼくにとっては大変な労苦だ。ぼくを平等に近づけるのは、その労苦を少しでも和らげるために他ならない。

世界にとってぼくは異質で、異常だ。それを認めなければ、ぼくはこの世界に存在できるといふ事実すら失ってしまうことだろう。

ぼくは全知全能じゃない。

だから、どこの誰にジャック・マクダエルがさらわれて、どこの倉庫に押し込められているかわからない。

「なんだい、てめえは……」

タンクトップを着て、袖から筋肉のついた腕を出し、トライバルのご立派なタトゥーを入れた男に、ぼくはソフト帽を外しながら言った。

薄暗い倉庫街。霧が漂う重苦しい場所。遠くで川が流れているのが、どこかの喧騒に紛れて消えている。そんな場所だ。

「こんばんわ」

「てめえ、誰だ」

「ぼくはフェイスレス。君とははじめましてだ。よろしく」

男は怪訝そうな顔をしたが、なおも警戒を解かなかつた。そのうち、おそらくは仲間なのだろうガラの悪い男どもが、もう一人影から現れる。

「こいつ、なんだ？ 顔がねえ」

「おかしな野郎だな。ビビってんのか？ おい、ハロウィンなら終わったぜ、スレンダーマン」

ぼくは嘲りの混じった言葉の数々に酷く気分を害した。外見をなじられるのは慣れているが、だからといって言われて気持ちいいものではない。

なによりぼくは彼らに挨拶をした。帽子を外して、昔の喜劇俳優みたいにバカ丁寧に。それを嘲りで返すのはおかしなことでいけないことだ。

不平等なのだ、それは。

「……挨拶がダメなら、握手をしよう」

「何言ってるんだ？」

「握手さ。スレンダーマンは怖くないんだろ。もつともぼくは彼みたいに手足は長くないけどね」

刺青男とガラの悪い男は二人で顔を見合わせた。結局刺青男のほうだが、ヘラヘラと笑いながら手を付き出してきた。

「ヘイ！ マス搔いた手じゃねえだろうな。ちゃんとママに除菌してもらったか？」  
どうやら二人はそれにバカ受けしたらしく、ぼくと握手はしてくれなかった。ぼくは心底呆れた。挨拶とは敵意のないことを示す行為だ。自分と相手がそう変わらない存在であることを、短い言葉やジェスチャーで示すことができる行為だ。東洋では、挨拶の代わりに頭を相手に下げる行為を「エシヤク」という。もはやそこには、言葉すら介在しない。それはとても平等な行為だ。ぼくにとって、いや世界にとって平等で神聖な行為だ。

だから、ぼくは挨拶をないがしろにする連中を許さない。不平等の極みだ。

ぼくは刺青男が戯れに出してきた手に、強引に握手を決めた。なるほど、なかなか握力に自信はあるらしかった。しかしぼくの握力はそれ以上だ。みしみしと音になる。激痛に男の顔は歪み、徐々に腰を砕かれ始め、ゆっくりりと跪く。あまりの痛みに立つていられないのだ。

「あまり人をからかうもんじゃないよ」

「や、やめ、痛い……やめてく……れ」

握手を続けていた男の右手人差し指が砕け、天を向いた。小指は大地を向く。完全に骨が砕け、僕の手を暖かく汚らしい血が濡らす。

もう一人のガラの悪い男は、完全に跪いた相棒を見捨てて逃げようとしていたが、ぼくはそれより早く男の襟首をひつつかみ、ゆつくりと言った。

「挨拶をしよう。そして握手をしよう。ぼくらは友達だ。違うかい、マイフレンド」

手と手を取り合えば、友情が生まれる。争う気持ちが雲散霧消し、平和が訪れる。

そんなことを言ったのは誰だったか。現実になんかことはない。

僕はねつとりと赤く濡れた拳から、雫を落としながら霧の中を歩く。煉瓦造りの古い倉庫の壁に靴音が反響する。雫が落ちる。据えた匂いが漂い、下水道の住人たちが尻尾をゆらしながら物陰に消える。

ぼくがたどり着いたのは、赤錆た鉄の扉だった。わずかに扉が開いていて、そこから歓声のような騒ぎが漏れていた。

ぼくはその隙間から、中を見た。ガラス——おそらくは、マジックミラーだろう——の先に眺えられた、小さな闘技場。鶏が羽根を撒き散らしながら、ほとんど姿の変わ

らぬ同じ仲間と戦っている。鬪鶏。動物保護団体が見たら卒倒するだろう。あいにくぼくはそうではなかったのだ、扉をゆっくり押し開ける。中には、数人の着崩した趣味の悪いスーツ姿の男たちがいた。紫煙が充満し、空気は最悪だ。

「……だれだ、テメエ」

金を数えていた男が手を止めていった。

「挨拶をさせてくれるかな、マイフレンド」

「テメエのような変わった友達は何にはいねえ」

「ぼくの名前はフェイスレス」

ぼくは構わず言った。挨拶をされれば、人は返さねばならない。それが僕の考える普遍的な『平等』で、『真理』なのだ。

「君の名前は？」

「ヨブ・マレット。……あんたが有名な怪人かい」

部屋に僅かな緊張が走った。男たちは馬鹿ではなかった。金を数えていたサンングラスの男——ヨブは、特にそうだった。彼はぼくを知っている。ぼくがどういう人間かも。

「ヨブ。君と友達になれて本当にうれしいよ」

「有名な殴打探偵どのお会いできて光栄だ。近くじゃなきや撃ち殺したいくらいだぜ」

彼はそう言いながらも、着崩したスーツの下へ手をつ込みながら言った。ぼくが気まぐれを起こして背中を向いた途端、容赦なく彼は引き金を引く。そういう宣言に見えた。友情を育むには時間がかかる。その過程で血が流れることもあるだろう。

「俺の兄弟分にアレハナって男がいる。やつの女はお前に殴られて、ひでえ目にあつたつて言うぜ」

「アーニーはひどい女だった。騙した男から巻き上げた金を、アレハナに貢いでた。

……彼女は十二人の男を騙して、自分の子供を見殺しにした」

ぼくは空中で指を動かし、『頭の中の電子端末』を動かしてデータベースから罪状を読み上げた。ぼくは彼女が二度と誰も騙せないように、原型がなくなるまで殴った。もちろん殺してない。ぼくは殴打探偵で、殺人鬼ではないからだ。

「それで死ぬ寸前まで殴ったのかよ。ひでえ野郎だ」

「ぼくは彼女が犯した罪と同等の罰を背負って欲しかったんだ」

「説教を聞くつもりはねえんだ、サイコ野郎。……早く出ていきな」

そういうわけにはいかなかった。ジャック・マクダエルは彼らに攫われ姿を消した。

ゴードンが信びよう性の無い嘘をつくとも思えない。答えを聞くまで、ここから出ていくことはできない。

「きみとぼくはもう友達だ。友人として意見が欲しい」

「情報の間違いじゃねえのか、探偵」

鬩鶏達にわかには殺気立ち、檻の中で翼をばたつかせた。同時に、ヨブの部下たちもスーツの中に手を入れた。鶏たちに賭けていた観客が、事務所の奥から歓声を挙げる。

ぼくは血で濡れた手袋を嵌めた手で、写真をゆつくりとつまみ出した。ジャック・マクダエルと、ライリーが笑顔で写っているもの。すでに失われて久しいもの。

「ジャックという名前だ。男の方。居場所を知りたい。情報元は明かせないが、君たちでここでさらわれたという話を聞いた」

「さらわれただつて？」

ヨブは部下たちを手で制し、眉をひそめながら足を組んだ。

「待てよ、探偵。なんか勘違いしちゃいないか」

「どういふことだい」

「ジャックは確かにここに来た。で、もうここにはいない。詳しくは言えねえが、ジ

ヤックは望んでここに来て、望んで出ていった」

どうも解せなかった。嘘をついていないことは——勘に過ぎないが——わかる。ジヤックは一体何者なのだ？

「有名人に話せるのはここまでだ。ファミリィには同じファミリィを守る義務がある」  
ヨブはリーダーらしい威厳ある言葉を吐いた。彼は仁義ある男であり、それで口をつぐめると考えたようだった。

それはぼくがふつうのにんげんで、ふつうの探偵だったなら、それで良かったろう。

ぼくは鶏がぐええ、と鳴き、闘鶏場と事務所に飛び散る血と羽を見た。鶏は死に、観客は大きな歓声を挙げた。

「マイフレンド、鶏が死んだよ」

「奴らの仕事で、俺達の食い扶持だ。チキン・ウイングは好物でな」

ぼくはヨブの顔に右ストレートを叩き込んだ。後ろにいた驚愕した部下の手を引っ張り、振り回した遠心力でぴんと伸ばされた腕を左チョップでへし折る。

ぼくはその場にいた全員の骨を折った。腕でも脚でも、歯でもいい。骨とは人間の構造上の根幹を成すものだ。一本折れば半分、二本折れば八割は手向かう気を無くす。マレット・ファミリィの面々は文字どおり骨があったので、余計に骨を折る羽目にな

った。

ぼくはヨブの胸ぐらをつかんで座らせると、二、三発頬を張った。覚醒したらしい彼にさらに一発。

「マイフレンド。悲しいよ。友達には隠し事をしてはいけないんだ」

「てめえ、ファミリーに……こんなことをしてタダで済むと……」

ぼくは頬を毆った。歯が折れ奥歯の欠片が血と一緒に床に撒き散らされた。

「申し訳ない気持ちはある。でもぼくは平等に君にも機会を与えた。丁寧に自分が何者かということを伝え、聞きたいことを聞いたはずだよ。君はその機会を裏切った」

「サイコ野郎め……てめえの要求が通らなきや暴力か！」

「誰しも反撃の機会は与えられている」

ぼくは大嫌いな教会の神父のように言った。エトソン神父はぼくをいじめたから嫌いなのだ。彼はぼくに人間が平等であることを教えてくれたけど、パンの代わりにぼくに裸でベッドに寝るように言ってきた。何をするでもなく、ただ気味の悪い視線でなめ回すように見ているのだ。もう何年も会っていない。彼はどうしているだろう。

「ともかく、僕が知りたいのはジャックの居場所だ。友達に迷惑をかけたくない」

「分かった。分かったよ。あんたが相手じゃ、何言っても無駄だ」

ヨブは諦めたように鼻血を拭った。ぼくも血塗れの手袋から雫を払った。ヨブは引き出しから書類を放り出して、言った。

「この事務所に化物みたいにおっかねえ強盗が、根こそぎひっくり返していった。それは……おっと、重要な書類を持っていきやがったんだ。もうどうにもならねえ」  
地面に散らばった書類を、ぼくは丁寧に拾い集めた。乾いていない血が書類ににじむ。

「お前、友達だのなんだのとやたらと気にしやがるが、本当にいるのか？ 友達つてのは」

「人類は皆等しく手を取り合えると、ぼくは信じてる」

「度を越えた博愛主義者だな。イエス・キリストもご照覧あれだ。神がいるなら、お前さんを確実に天国にお連れなさるだろうよ」

「神はいない」

ぼくは静かに言った。神がいるならば、ぼくの父さんは失踪しなかったし、ぼくの母さんはぼくをぶたなかつたはずだ。エトソン神父はぼくに見返りを求めなかつただろうし、エリサは強姦された挙句川に浮かぶこともなかつた。ぼくの顔が失われることも。

「神はいないんだ、マイフレンド。この世界を作ったのも、そこで不平等を強いるのも受けるのも人間だ。それ以上でも以下でもないんだ……」

書類に書かれていたのは、まったく別人のデータだった。名前はトーマス・ベイブ。ヨブは、ジャックのことだと言った。ジャックは自らを失い、トーマス・ベイブになったのだ。それはFBIがよくやる証人保護プログラムのようなものだった。手段が合法か非合法か、その程度の違いだ。

彼は顔を失った男になったのだ。

理由はどうあれ、望んだのか強制されたか、とにかく彼はそうなった。すべてをネタバラししたヨブは饒舌に語った。

「ジャックは何かを恐れてた」

「何をだい？」

「分からねえ。とうとう言わなかった。カミさんにも、親兄弟にも、俺にも言わなかった。……これはな、探偵。ビジネスなんだ。自分ではない誰かになる。その手助けをする。案外金持ちつてのは、そういうのを望んでる。ふっかけても金を払う」

「金のないものにはその権利はないと？」

「当たり前だろ。俺たちにはノウハウがある。それを金で売って何が悪い」

ぼくは言い返すことも殴りつけもしなかった。ヨブのいうことは人間社会において是とされることだった。許せない気持ちはあるが、逆に言えば金さえあればどんな人間でも平等に扱われる。僕が嫌うのは物質的不平等とは異なる。

「彼にはもう会えないかい？」

「俺はジャックの情報は売ったが、彼の安全まで売る気はねえ」

「君は尊敬に値するよ、マイフレンド」

金で人の心は買えない。しかし信頼は勝ち取れる。ぼくはヨブと握手した。ビジネスとはいえ、彼は一人の人間を守ろうとした。誤解からとはいえ、ぼくは彼を殴った。

その謝罪の気持ちの現れだ。

「……ところで、君には鶏を闘わせて金を巻き上げるなんて権利があると思うかい？」

握手した手を文字通り握りしめる。小枝を折るように指がひび折れる。ヨブの顔が再び恐怖に歪む。

「もちろん、無い。誰にも命をもてあそぶ権利は無いんだ」

鶏が息絶え、観客が悲鳴のような歓声をあげた。

外は小雨が降り始めていた。

ぼくは血で塗れた手袋を捨て、マッチをすって火を点けた。それだけでは火はつかない。懐からスキットルを取り出すと、中身を手袋に振りかけた。高アルコールの刺すような香りが漂っただろうけど、ぼくにはそれを感じ取ることはできなかった。東洋では死者を燃やすことで、天国に連れて行く文化があるという。『友達』の血を浴びた手袋には、天国に行く資格なんてない。しかし不平等を正したことで、救いを与えられる権利がある。悪いことをした分いいことをすれば、天国には行ける。

ぼく自身が、正しいかどうかはわからない。ぼくの信念が正しいかどうかを誰かの正しきで定義することなんて考えられない。警察は法律でそれを行うけど、それが全てだとは思わない。法律は手段であり、枠組みであり、ルールだ。ルールに書いてあったとしても、使う者が間違えば、正しきは失われ間違いになる。

べろべろと炎で舐められた手袋は天国に行ける。いずればくも、こうした形で天国に行くことだろう。ぼくは自分で自分の正しさを信じているけれど、誰もぼくの事を正しい人間だと思つてなどくれないからだ。ただ死ぬだけで、天国への階段を登らせ

てもらえるとは思えない。

「……整形手術には、カネがかかる」

ヨブの言っていたことを反芻する。金はどこにでもあるが、手に入れようと思うと想像以上に難しい。それがまっとうな手段でなければ尚更だ。ヨブがどれくらい金でのビジネスを仕切っていたのかはわからないけれど、ライリーは彼の事を「貿易会社のサラリーマン」と表現した。言葉通りにとるなら、それなりに高給取りではあるのだろう。

しかし相手はマファイアで、やることは非合法の整形手術だ。ただ単に顔を変えるだけならそんな回りくどい真似はしなくても良いはずだ。時間をかけてふつうの医者を使うほうがマシだ。彼が失踪してまだ二日しか経っていない。

ぼくは空中で指を滑らせ、あるはずのないデータベースにアクセスし、推論した。なんてことはない、ぼくはこうした小難しいことを集合させて結論を出すのに時間がかかるだけなのだ。思考を架空の電子端末に任せているに過ぎない。

『電子端末が』出した結論は、ジャックではなくトーマスの行方を追うことだった。

彼は別人になった。ならば、彼はトーマスとしてこのオールドハイトに存在する。

ぼくは砂利を踏み、水たまりに足を突っ込みながら、追跡を始めた。トーマスには、

トーマスの信じた正しさがある。彼が選んだ選択肢の先を、ぼくは探偵としてたどっていかなくてはならない。

果たしてその行為は正しいことか、否か。

すべての探偵が悩んでいる疑問を、ぼくは足を踏み出し蹴りつける。

ぼくは天国ヘブンの外側アウトサイドにいる。外側にいる僕が天国に入っていくためには、炎で焼かれるほかない。

ぼくは薬品で顔を焼かれることすら体験しているというのに。

この世の中は不平等だ。不平等に生まれ、不平等に生きてきたぼくがそう考えるのだから、まちがいない。

オールドハイト中央通り。朝のビジネス街は、ネクタイを首輪のように結んだ人々が行き交っている。僕は世界と奴隷から目を背けるように、コートの襟を立てた。その中のビルの一つ——ターコイズ・ワールド・トレード社の扉をくぐった。受付嬢が一人。警備員が二人、大きなエレベーターの扉を守護するように後ろ手を組んで立っている。

「トーマス・ベイブ氏にお会いしたい」

ぼくはざりざりと声を震わせて言った。受付の女性は青ざめた顔で首をかしげているが、ぼくは構わず同じことをもう一度繰り返した。探偵として依頼人のプライバシーは明かさなかつた。トーマス・ベイブが、少なくとも二日前まではジャック・マクダエルであつたことも。

「失礼ですが、あなたは」

「探偵です。フェイスレス、と名乗っています」

警察官と見まがうような、屈強な青い制服を着た男たちが、ぼくを見てなにやら相談している。怪しい男だ。叩き出すべきだろうか。ぼくには関係がない。どうにかする方法は身に着けている。

「……ジャック・マクダエル氏について伺いたいとお伝えください」

受付嬢はさらに顔を青ざめ、受話器をひっくり返すような勢いで内線を繋ぎ始めた。小声で二言三言喋つた後、受付嬢はエレベーター最上階へ行くよう、ぼくに言った。

「ありがとう」

睨み下ろすような警備員どもに、ぼくはエシヤクし、エレベーターへと入つた。重たとともに、自分の体がどんどん上へと伸びていく。ぼーん。軽やかな音と共に、重々

しい扉が開く。

「ジャック・マクダエルさん。はじめまして。ぼくの名前はフェイスレス」

ぼくはソフト帽を取り、胸の内に取ると、深々と頭を下げた。それはぼくの儀式めいた行為だった。目的をもうすぐ達したことに對する、感謝の表れともいえた。

「君が、かの有名な怪人フェイスレス？」

穏やかな男であった。清潔感のある黒髪を後ろへなでつけた、背の高い男性。ハンサムな男だったが、その顔が果たしてジャックのものだったのか、作られたものだったのかは、ぼくにはわからなかった。

「誰が君を？」

「探偵には依頼人に対する守秘義務が課せられています」

ぼくはざりざりと当然の事実を突きつけた。ぼくはならず者ではなく、あくまでも規範の内で活動する探偵なのだ。殴打探偵。ぼくの存在はあつてはならないものかもしれないけれど、依頼人に課せられた契約はまっとうしなくてはならない。それが信頼と依頼金に対する対価であり、平等というものだ。

「そうか……いや、わかっているよ。ライリーだろう。君をよこしたのは」

「ジャック・マクダエルさん。彼女はあなたを心配しているんです」

トーマスはわずかに笑みを浮かべて、ぼくにソファにかけるように言った。そして彼はオフィスの隅にあるバー・カウンタ―に移動して、アイスボックスからクラッシュアイスを取り出すと、いくつかがグラスに入れた。

「ウイスキーは好きかい」

「酒は飲まないようにしているんです」

「そうか……いや、すまない。一杯やらせてくれ」

「整形手術をして、別人になろうとしたのはなぜです」

ぼくは琥珀色の液体を流し込むトーマスに、直球の質問を浴びせた。まわりくどいのは苦手だ。ぼくは結論を薄める趣味は持ち合わせていない。

「目的と手段が同じだけさ、ミスタ・フェイスレス。僕はただ『別人になりたかった』のさ」

「嘘はやめましょう。それだけ言うために、ウイスキーを一気に飲む必要はない。できたばかりの会社でふんぞり返る意味もない。あなたは何を手に入れて、何を失ったのです？」

人を殴るということとは、ぼくにとって不平等を正すための手段であり、不平等なことをした人に救いか許しを与える行為でもある。ぼくは乱暴をしたくて殴っている

わけではないのだ。もちろん身を守るために相手を毆ることも多々あるけども、それを楽しんでゐるわけではない。

理由をきちんと聞いたうえで、判断する。毆打探偵として当然のことだ。

「……別人になりたかった。それは本当だ。嘘じゃない」

「奥さんを捨てて、愛人の元に走りたかった？」

「浮気はもう一か月前に終わつたよ。彼女——エリーの生死も、もうわからない。僕はつてをたどつてこのオフィスに避難しているだけなんだ」

トーマスは窓の外を見ながら、寂しそうにつぶやく。ライリーは浮気が原因で、ジャックの心が離れていったと言つていた。しかし、これでは話が違ふ。彼は確かに浮気をしてゐた。しかし彼はすでにその関係を終えていた。

「では、なぜ？」

「君はライリーを見てどう思った？」

「形はどうあれ、夫を心配する妻に見えましたがね」

ぼくの言葉に、トーマスは自虐気味に笑みを浮かべた。ぼくの言葉は的を外れだとも言うように。いよいよおかしくなつてきた。ぼくが毆るべき相手はどこにいるのだろうか。

「ライリーは冷たい女だ。……僕は彼女と結婚したが、それは彼女が結婚したという事実を得ただけだった。愛は無かったんだ。僕は、彼女から逃げて、新しい人生を得たかったのさ」

「それで、顔のない男になったと」

「ああ。ライリーは自分が完璧だと思っている。女として、社会人として、完璧だと。彼女は僕の逃亡を許さないだろう。夫の僕を妻として追いつける。嫌になったんだ、役割を押し付けられるのが」

「では、ジャック・マクダエルは死んだと？」

ぼくは確認するように言った。重要事項だった。仕事の内容が、どうやら変わりそうだった。ぼくは完全にジャックの味方になりかけていた。ぼくは不平等を押し付ける人間を何より嫌っていたのは言うまでもないことだし、ジャックはその不平等にさらされ続けた結果、『自分』すら失った。

彼は、ぼくの仲間なのかもしれない。

「エリーのように、命を奪われることはなかったけどね」

ぼくは立ち上がり、彼の肩を叩いた。ビジネス街にはオールドハイト特有の霧がかり始めていて、しとしとと雨粒が落ちていた。ぼくはそんな街の風景を背にして、

彼と友人の証の握手をした。

「マイ・フレンド。挨拶をしよう」

「ああ、すまない。僕は、トーマス・ベイブ——」

ぼくは普通の力で彼と握手をした。彼もまた握手し返した。

「死んだ人間は、殴れない。そうだろう、トーマス」

ぼくはざりざりと喉を震わせながら言った。

ぼくは中古の椅子の上で目を覚ました。ドアの先で、こつこつと階段を上る誰かの足音が響いていた。僕は赤い全頭マスクの上から、顔を掻いた。ノックの音。ドアの外には細い人影。

「開いていますよ。どうぞ」

ぼくは入ってきた人物——ライリー・マクダエルの姿を見ていった。

「調査結果をお渡ししなくてはなりません」

「あの人が亡くなっていたというのは、本当なの？」

ぼくはライリーにあらかじめ、ジャックがすでに死んでいたことを伝えていた。そ

うでもなければ、彼女はトーマスを探し出してしまふかもしれないからだ。

「ええ。すこし失礼」

ぼくは頭の中の電子端末を動かすために、空中で指を滑らせた。ライリーのことを調べるのは、すこし骨が折れた。相手の骨をいくらか折ってやることで解決できたけれど、重労働であったことは間違いない。

「あなたは収入がとても多いのですね。貿易会社を経営している」

「……そんなこと、あなたに言ったかしら」

「調べました。あなたの会社はフロントマンであるあなたのカリスマで成り立っている。完璧な女性、ライリー・マクダエルCEO。女性の代表。だから、あなたの人生に間違いがあつてはならない。あなただけでなく、あなたの夫も幸せで完璧でなくてはならない。ジャックはそれが苦痛で『この世から消えた』」

ライリーは口を結び、すでにうつむいていた。ぼくは構わず話をつづけた。

「しかもあなたはその前に、ジャックの浮気相手を殺し屋を介して消している。跡形もなく。そして、それをジャックに伝えた。それが、依頼日の二日前だった」

「……それがなんだったというの」

「結論を言いますよう、ミス・ライリー。あなたは嘘をついた。探偵であるぼくにで

す。それはぼくにとつて何よりも許しがたいことで、実際許されないことです」

ぼくが立ち上がった瞬間、ライリーもまた立ち上がった。彼女はドアノブを必死に回していたが、無駄だった。この部屋は僕の机にあるスイッチですぐに施錠できるよ  
うになっているのだ。

「私を殴る気なの？ そんなこと、許されないわ！ わたしは、女で、社長で、社会的地位が……」

「ぼくにとつてあなたはただの嘘を吐いた女だ。偽りを作り出し、ぼくの友達を不平等においやった。それは許されないことなんだ」

すりガラスに白くペイントされた『DETECTIVE』に、血が何滴か飛び散った。殴りつける音だけが、その建物の廊下に響いていた。

ぼくはまた不平等を正した。それが本当に正しいことかどうかはわからないけれど、その行為はぼくの正義と信念に基づくものであることだけは間違いない。炎に焼かれてこの身すべてが許される日まで、ぼくは誰かを殴ることで不平等を正す。それが間違いだってという権利は、誰にもない。

だってこの世は誰しも平等だからだ。

終